ボッチャを用いた体験授業が中学生の障害や障害者スポーツ意識に及ぼす影響

齊藤まゆみ*・澤江幸則*・齊藤仁人*・松原　豊*

The influence of boccia-based experience classes on students' positive perception regarding disability and para-sports

SAITO Mayumi *, SAWAE Yukinori *, SAITO Masato * and MATSUBARA Yutaka *

Abstract

The purpose of this study was to clarify the effectiveness of boccia-based experience classes on the perception of people with disabilities, disability sports (para-sports), and consciousness of "adapted physical activities" in junior high school students. The study involved 62 participants aged between 12 and 13 years. They were divided into three groups according to the level of experience of the person with disabilities (high group 22, low group 17, and no group 23). The class consisted of a lecture on boccia, after which experience learning took place using "I'mPOSSIBLE" as the teaching material. A questionnaire was administered before and after the class. The results suggested that although the participants' relatability to people with disabilities influenced their perception of them, participating in the boccia-based experience class positively influenced the whole group's consciousness about people with disabilities. On the other hand, there were no recognized differences in the consciousness of "adapted physical activities" before and after the class. The class style of the guest teacher influenced this result. The program of this class was effective for junior high school students. It is necessary for junior high school teachers to acquire a consciousness of "adapted physical activities" and to conduct classes pre-emptively.

Key words: adapted physical activities, Paralympic studies, inclusion

1. 緒言

文部科学省は2012年に、我が国において最も積極的に取り組むべき重要な課題として共生社会を目指すことを掲げ、「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築のための特別支援教育の推進についての基本的考え方が、学校教育関係者をはじめとして国民全体に共有されることを目指すべきである」ことを示した[6]。そして、「共生社会とは、『これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会』であり、『誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会』である」[6]とされている。しかし、特別支援教育制度において通常の学校（小学校、中学校、高等学校）に在籍する特別支援対象児童生徒は約13万人[3]となっており、全学齢期児童生徒数の1.2％にすぎない。したがって現状では通常の学校に在籍する児童生徒が障害者と日常的な関わりを持つ機会は少ないと推察される。人は、さまざまな経験によって障害者にネガティブなイメージを持ったり、ステレオタイプ化された見方を持ったりすることがあり、教

* 筑波大学体育系
Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

育的な活動として適正な障害理解の促進が必要[15]と指摘されている。そこで、教育への適切な取り組みを考えていく必要がある。

そこで、本研究の最終目標は、我が国が目指す、「スポーツを通した共生社会の実現」[14]に寄与するために必要な教育内容を提案することとした。現行の学習指導要領解説には、オリンピック・パラリンピックに関する指導の充実が明示され、平成29年告示の小学校学習指導要領解説：体育編では「パラリンピック競技などの障害者スポーツの体験やスポーツ大会の企画・運営など、スポーツとの多様な関わり方を楽しむことができるよう配慮すること」[4]、平成29年告示の中学校学習指導要領解説：保健体育編では、「オリンピック・パラリンピックに関する指導の充実を図る観点から、パラリンピック競技大会で実施されている種目などの障害者スポーツを体験すること」[5]が示され、児童生徒の意識変容を促し、多様な行動変容につながることが期待される。しかし、具体的な指導内容や指導方法についての記載はなく、教員のパラリンピック教育に対する必要性や認識についても全体的に低い傾向にあること[9]や、単にパラリンピアンの講演会やパラリンピック種目の体験にとどまる現状[16]が報告され、共生社会の実現という視点で期待される教育効果をもたらしていない。オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議[8]が指摘した「パラリンピックについての学び」と「パラリンピックを通じた学び」をもとに検討すると、パラリンピック教育で求められる生徒の意識変容とは、障害に対するポジティブイメージ傾向が高まり、障害を多面的に捉えることができるようになること、障害者スポーツを体験することで、障害者スポーツのスポーツとしての側面に気づき、障害者スポーツのイメージが肯定的になることである。

そのため、障害イメージと障害者スポーツイメージに影響をあたえるものとして、パラリンピックにおいて重度の四肢まひ者が競技するボッチャに注目した。授業を通してボッチャというスポーツがあることを学び、スポーツをする存在である障害者の存在にも気づくことを通して生徒の意識変容が促されるという仮説をたてた。以上のことから、本研究の目的は、パラリンピック競技大会で実施されているボッチャを用いた体験授業が中学生の障害や障害者スポーツ意識にどのような影響を及ぼすかを検証することである。

2. 方法

2.1　対象者

A県内にあるB中学校第1学年に在籍する12-13歳の生徒70名のうち、すべての日程に参加した62名を対象者とした。

2.2　調査方法

2.2.1　体験授業内容

対象者は、パラリンピックスポーツを題材に、生徒に共生の視点を培うことを目的としたIPC公認教材I'mPOSSIBLE[1]の「テーマ2 授業4：ボッチャをやってみよう！」を用いた授業に参加した（図1）。この授業は202X年Y月Z日に「総合的な学習の時間」において、アダプテッド体育・スポーツ学を専門とする大学教員と大学院生が学外講師として担当する形式で実施した。

2.2.2　調査方法

授業前後で質問紙調査を実施した。調査項目は、アダプテッド・センシティブ尺度[9]4項目と障害者との接触経験についての計5項目とした（表1）。障害者との接触経験については、あなたの経験であてはまるものとして、「障害のある人を見たことがある」「障害のある人と話をしたことがある」「障害のある人と一緒に遊んだ／スポーツをしたことがある」という選択肢から回答を求めた。アダプテッド・センシティブ尺度は、障害イメージ、障害者スポーツのイメージ、アダプテッドの主体的意識、アダプテッドの実践場面への適用の4項目である。アダプテッドの主体的意識では、障害のある友だちに対してスポーツをする際に、アダプテッドを主体的に行えるかについての問いとなっている。また、ア

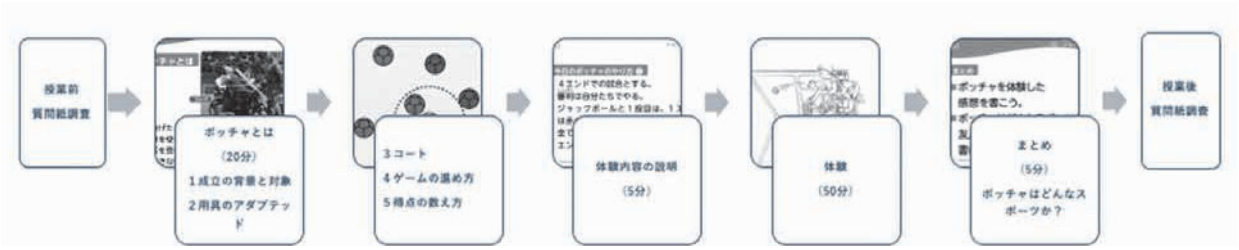

図1　授業の流れ

表 1　調査項目

Q1「障害」から連想するイメージを以下のなかから必ず3つ選んで（○）をつけてください。		
（　）困っている	（　）個性的	（　）手伝いが必要
（　）不便なことがある	（　）その人らしさ	（　）リハビリ
（　）自由に動けない	（　）できることがある	（　）車いす
Q2「障害者スポーツ」から連想するイメージを以下のなかから必ず3つ選んで（○）をつけてください。		
（　）楽しそう	（　）大変そう	（　）チャレンジしてみたい
（　）不便	（　）激しい	（　）障害者のためのもの
Q3 障害のある友だちとスポーツをするために必要なものを以下のなかから必ず3つ選んで（○）をつけてください。		
（　）障害者スポーツに詳しい先生や指導者		（　）スポーツのルールを変えること
（　）障害者スポーツの本や資料		（　）障害のある友だちと相談すること
（　）障害者スポーツ専用の道具や場所		（　）サポートすること
Q4 体育の授業で、バスケットボールで試合をすることになりました。自分のチームメイトにいる「車いすに乗っている、手足をうまく動かせない友だち」と一緒にバスケットを楽しむために必要だと思うことを以下のなかから必ず3つ選んで（○）をつけてください。		
（　）友だちがうまくなるように、練習をがんばってもらう		
（　）友だちも楽しめるようにルールをかえる		
（　）あまりボールを渡さないようにしてあげる		
（　）みんなが車いすにのって車いすバスケをする		
（　）無理をさせず、得点係や応援でがんばってもらう		
（　）ボールを使いやすいものにかえる		
Q5 あなたの経験であてはまるものに（○）をしてください。		
（　）障害のある人を見たことがある		
（　）障害のある人と話をしたことがある		
（　）障害のある人と一緒に遊んだことがある		
（　）障害のある人と一緒にスポーツをしたことがある		

ダプテッドの実践場面への適用については、具体的な場面をもとに、どの程度、アダプテッドの内容を含めることができるかを問う内容となっている。回答は強制選択方式とし、設問ごとの選択項目から 3 項目を選択するように求めた。

2.2.3　分析方法

アダプテッド・センシティブ尺度で示された標準化得点をもとに、対象者の回答を授業前、授業後において各項目 0-6 点で得点化した 62 組のデータを分析対象とした。障害イメージ、障害者スポーツのイメージ、アダプテッドの主体的意識、アダプテッドの実践場面における得点を、授業前と授業後で Wilcoxon の符号付き順位検定を行った。次に、障害者との接触経験について、見たことがあるという回答を経験無群、話をしたことがあるという回答を経験低群、一緒に遊んだ／スポーツをしたことがあるという回答を経験高群に分類したところ、経験無群が 23 名、経験低群が 17 名、経験高群が 22 名となった。そこで障害者との接触経験別に 3 群に分け、接触経験の違いが障害や障害者スポーツのイメージに与える影響について検討するために Kruskal-Wallis の H(K) を用い、多重比較は Bonferroni に依拠した。分析には IBM SPSS Statistics ver27 for Mac を用い、有意水準は 5% とした。

2.2.4　調査手続き

本研究は筑波大学体育系研究倫理委員会の承認（体 19-68）のもとに実施した。まず、202X 年 Y 月に対象校に研究協力依頼と承諾を得る手続きをした。次に、保護者および対象者へ文書による研究の説明を行い、参加への同意を得た。その後、2 時間の体験授業を行い、授業前後で生徒に質問紙調査への記入依頼をした。調査は体験授業当日に授業前後で実施した。調査は前後で同一の ID を付与した用紙を用い、無記名で実施した。調査用紙の配布、説明と回収はホームルーム教室にて担任が実施した。

3. 結果

3.1　授業前後のアダプテッド・センシティブ尺度スコア

体験授業前後における各種スコアの結果を示した（表 2）。障害イメージのポジティブ傾向は、授業前 1.97 ± 1.933 から授業後 3.65 ± 1.900 へとスコアが高くなったことからポジティブな方向への変化であり、その差は有意であった（Z=-4.96）。また、障害者スポーツイメージのポジティブ傾向も授業前 3.89 ± 1.943 から授業後 4.66 ± 1.305 へとポジティブな方向へ変化しており、その差は有意であった（Z=-2.77）。アダプテッドの主体的意識とアダプテッドの実践場面への適用については授業前後での差は認められなかった。

表 2　体験授業前後における各種スコアの比較

項目	平均値±SD 授業前	平均値±SD 授業後	Z値
障害イメージのポジティブ傾向	1.97±1.933	3.65±1.900	-4.96 **
障害者スポーツイメージのポジティブ傾向	3.89±1.943	4.66±1.305	-2.77 **
アダプテッドの主体的意識	3.74±1.425	3.97±1.599	-1.26 n.s.
アダプテッドの実践場面への適用	5.21±1.516	5.50±0.954	-1.67 n.s.

Wilcoxon の符号付き順位検定による　　**:p<.01

3.2　障害者との接触経験による比較

3 群間で授業前の障害イメージを比較したところ、経験無群と経験高群、経験低群と経験高群との間で有意な差が認められた（$\chi 2$（2）=7.267, 漸近有意確率 0.026）（表 3）。さらに 3 群間で授業前後のスコア比較をしたところ、障害イメージのポジティブ傾向は 3 群いずれにおいても授業後にポジティブな方向への変化があった。また、障害者スポーツイメージのポジティブ傾向は、経験無群と経験低群において授業後にポジティブな方向への変化があった。アダプテッドの主体的意識とアダプテッドの実践場面への適用は 3 群いずれにおいても授業前後で差が認められなかった（表 4）。

表 3　障害者との接触経験と障害イメージの比較

経験の程度(n)	平均値±SD
全　体（62）	1.97±1.933
経験無（23）	1.48±1.620
経験低（17）	1.41±1.698
経験高（22）	2.91±2.144

Kruskal-Wallis の H検定を用い、多重比較はBonferroniに依拠した。*：p<.05

表 4　障害者との接触経験別にみた各種スコアの授業前後での比較

	平均値±SD 授業前	平均値±SD 授業後	多重比較
1：障害イメージのポジティブ傾向（n）			
全　体（62）	**1.97±1.933**	**3.65±1.900**	**授業前：無<高*,低<高***
経験無（23）	1.48±1.620	3.65±1.774	前＜後*
経験低（17）	1.41±1.698	2.82±2.128	前＜後*
経験高（22）	2.91±2.144	4.27±1.667	前＜後*
2：障害者スポーツイメージのポジティブ傾向（n）			
全　体（62）	**3.89±1.943**	**4.66±1.305**	
経験無（23）	4.04±1.918	4.83±1.114	前＜後*
経験低（17）	3.41±2.181	4.41±1.583	前＜後*
経験高（22）	4.09±1.797	4.68±1.287	
3：アダプテッドの主体的意識（n）			
全　体（62）	**3.74±1.425**	**3.97±1.599**	
経験無（23）	3.30±1.146	3.65±1.555	
経験低（17）	3.76±1.715	4.24±1.562	
経験高（22）	4.18±1.368	4.09±1.688	
4：アダプテッドの実践場面への適用（n）			
全　体（62）	**5.21±1.516**	**5.50±0.954**	
経験無（23）	5.09±1.593	5.39±0.891	
経験低（17）	5.59±03507	5.53±1.068	
経験高（22）	5.05±1.914	5.59±0.959	

Kruskal-Wallis の H検定を用い、多重比較はBonferroniに依拠した。　*：p<.05

4. 考察

4.1 ボッチャを用いた体験授業が中学生の意識に及ぼす影響

ボッチャを用いた体験授業前後で、障害イメージのポジティブ傾向、障害者スポーツイメージのポジティブ傾向はポジティブな方向に変容した。本研究では、ボッチャ競技について、パラリンピックでは最重度の障害者が競技しているということを知識として学習したのち、実際にスポーツとして体験することで、ボッチャのスポーツとしての楽しさに気づくこと、スポーツをする障害者の存在にも気づくことを通して意識変容があると仮定している。スポーツ体験による障害イメージに関する先行研究として、小学生を対象とした車いすバスケットボール体験による障害イメージの肯定的な変化[17]、小学生を対象としたゴールボールの体験授業における障害イメージの肯定的な変化[7]は報告されているが、中学生を対象とした研究は実践報告が散見される程度である。下山ら[13]による報告では、中学生を対象としたボッチャ体験後のアンケートで「ボッチャの体験は、障害に対する考え方に影響を与えた」という問いに対する5件法の回答で4.29という肯定的な回答が示されている。しかし、ボッチャ体験の何が影響を与え、障害に対する考え方がどのように変化したのかについて言及されていない。

本研究では、障害イメージのポジティブ傾向が高くなるという変化を示し、かつ障害者スポーツイメージについても授業後にポジティブ傾向が高まることが示されたことから、スポーツとしてのボッチャを知識として学び、その後にボッチャを体験することで生徒の意識変容があることを確認できた。

一方で、アダプテッドの主体的意識やアダプテッドの実践場面への適用については授業前後での差は認められなかった。その理由として、今回の授業がいわゆる出前形式であったことが指摘できる。アダプテッドの主体的意識は、アダプテッドが必要な場面で自らが主体的に必要な知識や情報を獲得するよう動く、実践するという意識である。しかし体験授業は、通常の授業で保健体育を担当する教員ではなく、外部講師が担当した。そのため、生徒にはこれまで経験したことがないボッチャという特別なことを、特別な用具を使って、学外から来た専門の先生が指導する授業という受け止めになったことが考えられる。授業後の調査結果から、アダプテッドの主体的意識の選択項目内容に着目すると、障害者スポーツに詳しい指導者の選択傾向が高いことがうかがわれた。初めてボッチャという競技、そして用具に触れた生徒には、ボッチャは専用の特別な用具が必要であると捉えられたことが推察される。この点については、アダプテッドの考え方を体験的に学ぶという授業構成、例えば、専用の用具がない場合は身近にあるものを工夫することでボールを作ることから始め、実践に応じて用具の変更調整を加えるなどの発展的な学習へと継続して展開するなどを含めて教育内容を検討していくことが必要である。

4.2 障害者との接触経験による比較

接触経験別に授業実施前の障害イメージを比較したところ、経験高群は、他の2群に比べ障害イメージのポジティブ傾向が高いことが示されたことから、これまでの障害者との接触経験が生徒の障害イメージに影響していると考えられた。一緒に遊ぶことやスポーツをするなどの経験を通してのみイメージがポジティブ傾向であることから、外見からの判断や表面的な交流だけでは不十分であることが示された。しかし、ボッチャを用いた体験授業を通して、いずれの群も授業後の障害イメージがポジティブに変化したことから、教育効果はどの群においても有効であると考えられた。したがって単に知識として学ぶだけでなくスポーツとして体験することの必要性が示唆され、接触経験が少なかった生徒にとって、スポーツを通した学びが有効であることが示された。

牧ら[2]は、パラリンピック教育と称して実施された教育内容を分析し、児童生徒の行動変容には理解・体験・交流の3要素の学習内容が必要であることを指摘している。また、下山ら[13]は、交流及び共同学習として中学生と特別支援学校の生徒がともに学ぶという実践からアダプテッドについて考えさせようとし、中学生に障害に対する考え方が肯定的になることを示した。しかし、現状の交流及び共同学習は、障害のある児童生徒は「お客様」状態であり、お世話する側とされる側という構図が多いことが指摘されている[12]。文部科学省はインクルーシブ教育の推進を掲げているが、形式のみのインクルーシブ[10]では、経験低群のように障害イメージがネガティブに捉えられる危険性も指摘できる。そこで、アダプテッドの考え方を持ち、実践できるような変化をもたらすためには、継続することによる授業の回数を増やすこととあわせて、障害者とともに学ぶ授業の計画も大切になると考えられる。

4.3 研究の限界

本研究で実施した授業は、パラリンピック教育と

して保健体育科の指導計画に組み込まれたものではなかった。障害者スポーツイベントであるパラリンピック大会開催前後における障害者スポーツに関する意識変容の研究からは、中学生ではイベント直後に障害やパラリンピックに対するイメージが肯定的な方向に高まるが、それらは一過性の変化であることも明らかにされている[11]。そのため、今回のようにイベント的に実施される形式では、その影響は限定的であることが考えられる。したがって、今後は保健体育科の年間指導計画に基づいた学内教員による継続的な授業が定着すること、そして長期的な視点での教育効果の検証が必要であると考えられる。

5. 結論

本研究は、パラリンピック競技大会で実施されているボッチャを用いた体験授業が中学生の障害や障害者スポーツ意識にどのような影響を及ぼすかを明らかにすることを目的とし、授業前後での意識についてアダプテッド・センシティブ尺度を用いて検証し、以下の結論を得た。

1）ボッチャを用いた体験授業前後で、障害イメージ、障害者スポーツイメージはポジティブ傾向に変容したことから、ボッチャ競技について、パラリンピックでは最重度の障害者が競技しているということを知識として学習したのち、実際にスポーツとして体験することで、ボッチャのスポーツとしての楽しさに気づくことができるようになり、障害に対してもポジティブなイメージが持てるようになると考えられた。

2）これまでの障害者との接触経験が障害イメージに影響を与えていることが示された。障害者との接触経験では、一緒に遊ぶことやスポーツをするなどの経験が必要であり、表面的な交流だけでは不十分であることが示された。しかし、ボッチャを用いた体験授業を通して、いずれの群も授業後の障害イメージがポジティブに変化したことから、本授業の教育効果はどの群においても有効であると考えられた。

3）アダプテッドの主体的意識やアダプテッドの実践場面への適用については授業前後での差は認められなかった。その理由として、今回の授業がいわゆる出前形式であったことが指摘され、年間指導計画に基づいた学内教員による継続的な授業が定着することの必要性が示唆された。

6. 文献

1） I'mPOSSIBLE 日本版事務局（2018）：テーマ 2 授業 4 ボッチャをやってみよう.「I'mPOSSIBLE〔教師用ハンドブック〕」.

2） 牧舞美，齊藤まゆみ，澤江幸則（2015）：日本におけるパラリンピック教育の方向性：プログラム内容の検討をもとに . アダプテッド・スポーツ科学専門領域 1（1）：30-33.

3） 文部科学省（2020.9.18）：特別支援教育資料第 1 部データ編. 20200916-mxt_tokubetu02-000009987_02.pdf.

4） 文部科学省（2017）：小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　体育編.

5） 文部科学省（2017）：中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　保健体育編.

6） 文部科学省（2012.7.23）：共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1321669.htm

7） 大山祐太（2016）：小学生を対象としたアダプテッド・スポーツ授業の効果の検討―ゴールボールを教材として―. 北海道教育大学大学紀要（教育科学編）66（2）：253-262.

8） オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議（2016.7.21）：オリンピック・パラリンピック教育の推進に向けて 最終報　告. https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/004_index/toushin/__icsFiles/afieldfile/2016/07/29/1375094_01.pdf.

9） 齊藤まゆみ，澤江幸則，齊藤仁人，松原豊（2021）：障害者スポーツ関連授業効果尺度の開発 1. 日本体育・スポーツ・健康学会第 71 回大会発表資料.

10） 齊藤まゆみ（2016）：特別支援教育時代の体育.（編）後藤邦夫「特別支援教育時代の体育・スポーツ」. 大修館書店，東京，13-16.

11） 澤江幸則，今林史佳，杉山文乃，齊藤まゆみ（2018）：パラリンピック大会開催前後における障害者スポーツに関する意識変容の研究②～中学生の「パラリンピック」および「障害」に対するイメージに着目して～. 日本体育学会第 69 回大会発表資料 .

12） 澤江幸則，綿引清勝，杉山文乃（2017）：インクルーシブ体育の現状と課題. 体育の科学 67（5）：335-340

13） 下山直人，小島道生，今井二郎，石飛了一，宮本信也（2017）：ボッチャ及びアダプテッド・スポーツに対する児童生徒の意識の検討：体験後に実施したアンケート調査を通して. 筑

波大学学校教育論集 39：19-26.
14）スポーツ庁（2017.3.24）：スポーツ基本計画．https://www.mext.go.jp/sports/content/1383656_002.pdf
15）徳田克巳，水野智美（2005）：障害理解―心のバリアフリーの理論と実際―. 誠信書房，東京.
16）矢島佳子，渡正，平賀慧，永田悠祐，中島裕子（2021）：東京都と千葉県におけるパラリンピック教育の実態と今後の課題―小学校・中学校・特別支援学校教員へのアンケート調査結果より―. パラリンピック研究会紀要 15：1-45.
17）安井友康（2007）：車いすバスケットボールの交流体験が障害のイメージに与える影響．障害者スポーツ科学 2（1）：25-30.